



# パナソニック汐留ミュージアム 「幸之助と伝統工芸」展を訪ねて

篠崎 泰夫

8月初めの熱暑の日にパナソニック汐留ミュージアムで開催中の「幸之助と伝統工芸」展を訪れた。ミュージアムはJR新橋駅から徒歩8分、東京銀座に程近いパナソニック東京汐留ビルの4階にある。常設展として20世紀最大の宗教画家と呼ばれるフランスのジョルジュ・ルオーの作品が展示されているが、今回は開館10周年を記念して4月から8月までの期間中、松下電器産業（現パナソニックグループ）を一代で築き上げた松下幸之助氏（以下、幸之助と略）が収集した伝統工芸品が特別展として展示された。

## 1. 幸之助と伝統工芸の関わり

幸之助の有名な言葉に「松下電器は人をつくるところでございます、あわせて商品もつくっております、電気器具もつくっております。」というものがある。幸之助の価値観の中で「人」が第一にあることをよくあらわしているといえよう。晩年には私財を投じて松下政経塾を創り人材育成に力を注いだことはよく知られている。しかし幸之助が、同時代に生きた文化人や伝統工芸家たちと積極的に交流し、支援するとともに、優れた工芸作品を数多く収集していた事はあまり知られていない。一体どんなきっかけで彼は伝統工芸に興味を持ったのであろうか。

四十代の頃、初めて茶の湯をたしなむようになった幸之助は、その後生涯の茶の師と仰ぐことになる裏千家十四代家元である無限齋宗室の人柄に大いに魅かれ、熱心に茶道に励んだという。そして茶道の精神の中に、彼が大切にしたい「素直な心」との共通点を見いだしたのだという。こうした中で幸之助の興味が、茶道具や、道具を作った人にも広がったことは想像に難くない。

後年、幸之助は、「大量生産品であっても、手に取ってみると工芸品の如く精密で正確な物を作らなければならない。」と語ったという。幸之助の目指したもののづくりの原点は、伝統工芸に見られるような妥協を許さない精緻なものづくりにあったのだろう。

第二次大戦を挟んだ動乱期に、伝統工芸家たちが困窮していた事を知り、幸之助は伝統工芸家の集まりである日本工芸会を通じて、工芸家たちが伝統技術を後進に伝える活動に経済的な支援をしたという。日本の

ものづくりの原点である伝統工芸の技を絶やしてはならないという、幸之助の強い思いが感じられる。

## 2. 幸之助の愛した伝統工芸品の数々

さて、実際の展示に目を移そう。展示は大きく二つのテーマに分かれている。第一のテーマは「素直な心—幸之助と茶道」である。入口の裏側に、「心」という書が展示してある（図1）。精神文化を重んじた幸之助の自筆である。この書が見守る落ち着いた空間には、幸之助が実際に使用した、あるいは鑑賞のために収集した茶道具が展示されている。幸之助は、樂家四代で十七世紀に創作活動をした樂一入による少し小ぶりの若干赤みをおびた黒茶碗を普段から愛用したという（図2）。その他、樂家十四代樂覚入作の赤茶盃など、現代の作家の作品が多数展示されている。萩焼の人間国宝三輪休和の晩年の作品（1980年頃）の萩茶碗は、素朴な風合いの中にどっしりとした落ち着きがある（図3）。

第二のテーマは「ものづくりの心—幸之助と伝統工



図1 松下幸之助による書



図2 樂一入「黒茶盃」17世紀—幸之助が愛用した



図3 三輪休和「萩茶碗」1980年頃

芸」である。この空間には、陶芸の他に、染織、漆芸、木竹工、金工、人形、截金など分野にとらわれないさまざまな伝統工芸品が展示されている。いくつかをご紹介します。

人間国宝の清水卯一による藍青瓷鉢は緑がかかった藍色の釉薬に幾重ものひび割れが重なり、引き込まれるような立体感を出している（図4）。人間国宝の黒田辰秋による金鎌倉四稜茶器は、螺旋形状をした小さな赤漆器であるが、その形と色合いの美しさに思わず見とれてしまう（図5）。同じく人間国宝の堀柳女による嘉納（衣装人形）は、息をのむような精緻な模様の衣装をまとっている（図6）。

ゆったりと時が流れる展示空間には、幸之助が伝統工芸に寄せた思いが凝縮されているように感じた。彼が伝統工芸の中に見たものづくりの原点は、迷いのある日本の製造業が、今後進むべき道のヒントを示しているのではないかと考えさせられた展示会であった。

読者の皆様には大変恐縮であるが、本展示会は既に終了している。松下幸之助氏が収集した、第一級の工

芸品が常設で展示してある場所は現時点では無いとのことである。是非、今回のような展覧会が今後も開催されることを願いたい。パナソニック汐留ミュージアムでは、年内はフランスの画家ギュスターヴ・モローとジョルジュ・ルオーの特別展が開催されている。絵画にご興味がある方は是非お訪ねいただきたい。

なお、パナソニックグループでは、松下幸之助氏の遺志を継ぎ、日本工芸会を通じて現在も伝統工芸家を支援していることをお伝えしておく。

最後になりましたが、お忙しい中ご案内をいただいた、パナソニック汐留ミュージアムの倉澤敏郎様、岩井美恵子様には厚くお礼申し上げます（図7）。



図4 清水卯一「藍青瓷鉢」1978年頃



図5 黒田辰秋「金鎌倉四稜茶器」1965～1972年頃



図6 堀柳女「嘉納」1981年



図7 ミュージアム入り口にて、左端：パナソニック汐留ミュージアム広報の倉澤敏郎様、右端：学芸員の岩井美恵子様、中央：筆者

■筆者紹介 篠崎 泰夫

旭硝子(株)中央研究所 ガラス領域技術グループ セラミックス技術ファンクション

■パナソニック汐留ミュージアム 東京都港区東新橋 1-5-1 パナソニック東京汐留ビル 4階

<http://panasonic.co.jp/es/museum>

[投稿歓迎－編集委員会では「ほっと」spring 欄への会員からの投稿を歓迎します。編集事務局までご一報ください。]